

第6学年 総合的な学習の時間 学習指導案

特別支援教育専修 山中彩加

1. 単元名 「誰一人取り残さないーパラリンピック調査隊ー」

2. 単元の目標

- ・パラリンピックの精神(価値、意義、歴史等)や競技種目の特徴、ルールを理解し、学んだことを踏まえて言葉やポスターにしてまとめることができる。 (知識・技能)
- ・課題を見だし、課題解決に向けて必要な情報を取捨選択して、収集して複数の情報を比較や関係付けて考えたり、考えたことを言葉やポスターを通して伝えたりすることができる。 (思考・判断・表現)
- ・パラリンピックの意義や障害のバリアに気付き、意欲的にアスリートや周囲の人々と関わりながら、課題解決へ向けて活動に取り組むことができる。 (主体的に学習に取り組む態度)

3. 単元について

(1) 教材観

パラリンピックはオリンピックの開催年に同じ都市、会場で行われる。昨年東京オリンピック・パラリンピックが開催されたこともあり、世界中から注目を浴びた。パラリンピックの原点(国際的な障害者のスポーツ大会)は現在のデフリンピックであり、様々な障がいのあるアスリートたちが創意工夫を凝らして限界に挑むパラリンピックは、多様性を認め、誰もが個性や能力を発揮し活躍できる公正な機会が与えられている場であって、共生社会を具現化するための重要なヒントが詰まっている大会でもある。パラリンピックは勇気、強い意志、インスピレーション、公平の4つの価値が重視されている。また、社会の中にあるバリアを減らしていくことの必要性や、発想の転換が必要であることに気付くことがパラリンピックの意義とされている。

東京パラリンピック(夏季・2020年)競技の22種目のうち、本単元では主に車いすバスケットボールを扱う。通常のバスケットボールのルールを理解し、経験のある学年だからこそ、これまで経験してきたバスケットボールと車いすバスケットボールを比較して検討することも可能である。パラスポーツが障害のある人だけでなく、“みんなができる”ことに気付くとともに、達成感を味わうことができる競技であり、新たな気付きを得ることで自分自身の考えに変化を与えることに適した教材であると考えられる。下肢などに障がいのある選手が車いすに乗って戦うバスケットボールは、コートの大ささ、リングの高さ、ボールなど一般のバスケットボールと同じでルールも一部を除いて同じものが適用される。ただし、車いすの特性を考慮し、ボールを持ったまま2プッシュまで車いすをこぐことが認められている。また、ダブルドリブルが適用されないため、ドリブルとボールの保持を繰り返すことができる。使用する車いすはバスケットボール専用で、タイヤはハの字に取り付けられているが、この角度が大きくなると回転性能が高くなり、小さくなると直進性能が高くなる。一般のバスケットボールと同じで、1チームは最大12名で構成され、コート上には5名が出場する。車いすバスケットボール独自のクラス分けとして、選手は障がいの程度に応じた持ち点が定められている。コート上の5名の持ち点の合計点が常に14点以内となるようにチームを編成しなければいけない規定があり、これによって障がいの軽い選手だけでなく重い選手にも出場機会が与えられるようになっている。

(2) 児童観 (略)

(3) 指導観

障害のある人の立場になって、生活の中で生じる壁を考える。その中で何が障害のある人にとってのバリア(壁)となっているのかを各自考え、ワークシートに記入する。学級全体でそれぞれの考えを共有するとともに、課題意識、目的を持たせたい。まずは、パラリンピックの競技映像や写真を見せたり、シンボルマーク、精神や競技種目、アスリートに関するクイズに取り組んだりすることでパラスポーツへの関心を高め、大まかにパラリンピックの精神、競技種目の特徴やルールを学ぶ。そして、その中から街中で見かける目に見える障害に着目するために、数多くある競技の中から車いすを使用する車いすバスケットボールを取り扱う。

車いすバスケットボールの体験は、あすチャレ！ school を用いる。あすチャレ！ school は、パラスポーツによるプログラムを通じて、「i enjoy !」の精神を胸に、参加者に気づきを与え、意識を変え、行動(明日へのチャレンジ)に繋げることを目的として日本財団パラスポーツサポートセンターが運営している取り組みの1つである。障害者が抱える一番の障害は身体上の障害ではなく、社会に存在する障害であるという考えをもとに、その障害は社会で生きる一人一人が視点を変え、気づいたことを行動に移す勇気があれば、取り除くことができるとしている。パラアスリートのデモンストレーション・パラスポーツ体験・講話の3部から構成される90分間の出前授業で、全国の小中高等学校を対象に実施されている。ゲストティーチャーとして車いすバスケットボールのアスリートを招き、デモンストレーション、パラスポーツ体験、講話、インタビューを通して社会や自分自身が無意識に持つバリアに気付かせたい。アスリートのデモンストレーションを実際に見ることで、障害に対する意識の転換を図る。また、応援することの意義、効果、力を実感することもねらいとしている。パラスポーツ体験では、楽しさや難しさを頭で理解するのではなく、体を使って理解することができる。実際にやってみることで、障害のある人を見かけたときの自身のハードルを下げるねらいもある。講話、インタビューでは、アスリートとコミュニケーションを取ることで、障害に対する理解や新たな気づきを得て、課題意識や考えの変容を目指す。

体験したこと、そこから新たに気付いたこと、感じたこと、興味を持ったこと等をワークシートにまとめ、課題(最初の授業でワークシートに記入した考え)を解決するための糸口をインターネットや書籍を活用して情報を集める。課題と解決のために調べたこと、考えたことについて学級内で各自発表する。発表内容から個々が持った問題、課題意識を他者と共有して全体に広げるために、カテゴリー別に弁別してグループに分かれる。そして、調べて集めた情報から学んだこと、あすチャレ！ school を通して学び得たことをグループごとでまとめ、これらを踏まえて今私たちにできることを考え、ポスター作成する。ポスターセッションを通してさらに学びを深める展開にしたい。

(4) ESDとの関連

・本学習で働かせるESDの視点(見方・考え方)

多様性…世の中には、様々な国・性別・人種・文化等があるように、様々な障害のある人がいるということを理解する。

公平性…障害は差別の理由にはならない、権利は平等にあるという考えを育む。

・本学習で育てたいESDの資質・能力

コミュニケーション力…児童同士の話し合い、障害のある人との交流の中で自分の考えを表現する。

協働的問題解決力…ポスターセッションに向けて、課題解決に対し児童同士で協力して取り組むことで

養う。

・本学習で変容を促すESDの価値観

世代内の公正…現代を生きる弱い立場の人のことも意識して行動できる。

人権・文化を尊重する…障害があっても差別されない、人権も保障されることを理解する。

・達成が期待されるSDGs

10 人や国の不平等をなくそう

4. 単元の評価規準

ア 知識・技能	イ 思考・判断・表現	ウ 主体的に学習に取り組む態度
①パラリンピックの精神(価値、意義、歴史等)や競技種目の特徴、ルールを理解している。 ②理解した内容を言葉や絵、図表を用いてまとめる技能を身に付けている。	①課題解決に向けて必要な情報を取捨選択して収集し、複数の情報を比較したり関係付けたりして考えている。 ②考えたことを言葉やポスターを通して伝えている。	①自分自身のバリアに気付き、意欲的にアスリートと関わろうとしている。 ②パラリンピックについて探究的な活動を通して、協働して課題解決に取り組もうとしている。

5. 単元の指導計画(全17時間)

次	主な学習活動	○学習への支援	評価(△)
1	障害のある人にとってのバリア(壁)を考え、ワークシートにまとめて、互いの考えを共有する。 障害のある人のバリア(壁)は何だろう。	○自分自身の障害に対するイメージや経験、障害のある人が感じる困難、壁について自由に発言させ、課題意識を持つことができるようにする。	
2	パラリンピックに関するクイズに取り組む。パラリンピックの競技映像や写真をもとに、パラリンピックの精神、競技種目の特徴やルールを学び、今後の見通しをつかむ。	○指導者がクイズを出題する。 ○東京大会を取り上げ、パラリンピックのシンボルマーク、精神や競技種目、活躍するアスリート等をクイズ形式で学ぶことで、児童の関心を高め、新たな気付きを得るきっかけを作り出す。	△ア① (知・技)
3	パラスポーツ体験を行う車いすバスケットボールについて知る。	○車いすバスケットボールについて学び、次回の授業で行うパラスポーツ体験に繋げる。	△ア① (知・技)
4	アスリートによるデモンストレーションを見てパラスポーツ体験を行う。	○ゲストティーチャーとしてアスリートを招き、デモンストレーション、講話を見聞きするとともに、パラスポーツ体験、インタビューからアスリートや児童同士でコミュニケーションを取る大切さを感じ取り、障害に対する考えの変容を図る。	△ウ① (主体的)
5	アスリートによる講話を聞き、インタビューを行う。		

6	<p>体験したこと、そこから新たに気付いたこと、感じたこと、興味を持ったこと等をワークシートにまとめる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・障害があってもなくても、みんなができる。(バリアがない) ・難しいけども楽しい。・達成感がある。 <p>障害のある人のバリアは体 だけでなく社会にある。</p>	<p>○それぞれが最初の授業で考えたバリア(壁)、課題と今回ワークシートに記入したことを見比べて、課題解決のための糸口を考えさせるようにする。</p>	△ア② (知・技)
<p style="text-align: center;"> 障害のある人のバリアは体 だけでなく社会にある。 ➡ バリアを取り除けば生きやすい社会になる。 そのためにどうすれば良いだろう。 </p>			
7 8	<p>インターネットや書籍を活用して情報を集め、その情報をもとに各自が設定した課題を解決するためにはどうすれば良いかを考え、ワークシートにまとめる。</p>	<p>○何を課題と感じ、解決の糸口に何を見つけ調べたのか、課題解決のために取り組んだ過程を各自で振り返ることができるように、ワークシートを効果的に使用する。</p>	△ア② (知・技) △イ① (思判表)
9	<p>調べたこと、考えたことについて学級内で各自発表する。</p>	<p>○自分自身の考えを発表するだけでなく、他者の考えもメモを取るように言葉かけを行う。</p>	△イ② (思判表)
10	<p>発表を踏まえてキーワードを抽出し、グループに分ける。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・パラリンピックの精神(価値、意義、歴史) ・競技種目、・障害について 等 	<p>○第9次の授業で取ったメモをもとにして、似た課題設定やキーワードごとに分類してグループに分ける。</p>	△イ① (思判表)
11 12	<p>調べて集めた情報から学んだこと、あすチャレ! school を通して学び得たことをグループごとにまとめる。</p>	<p>○同じ又は似た点に課題意識を持った班員が話し合い、考えをグループ内で共有することで同じような課題意識でも様々な考え方があるということに気づき、特に関心のある特定の観点を追求する。</p>	△ア② (知・技) △イ① (思判表)
13 14	<p>今私たちにできることを考え、ポスター作成する。</p>	<p>○グループごとにポスターにまとめた特定の観点だけでなく、他のグループの考えを取り入れることで、他の観点の新たな気づきを得るとともに、さらに深められるようにする。</p>	△イ② (思判表)
15 16	<p>ポスターセッションを行い、ポスターセッションで新たに気付いたこと、感じたこと等をワークシートにまとめる。</p>	<p>○グループごとにポスターにまとめた特定の観点だけでなく、他のグループの考えを取り入れることで、他の観点の新たな気づきを得るとともに、さらに深められるようにする。</p>	△イ② (思判表)
17	<p>全体を振り返るとともに、障害のある人にとってのバリア(壁)を再度考え、ワークシートにまとめる。</p> <p>障害のある人のバリア(壁)は何だろう。</p>	<p>これまでのワークシートから、これまでの学びを振り返るとともに、第1次の授業で示した問いを再度児童に問いかけ、自分自身の考えの変容に気付かせる。</p>	△ウ② (主体的)